

# 令和元年度 第1回熊本市小中一貫教育検討委員会議事録

日時：令和元年8月23日 14:00～15:30

場所：ニッセイ・ウェルス生命熊本ビル7階会議室

## ○議事録

- 1 開会
- 2 教育委員会挨拶
- 3 関係者紹介
- 4 委嘱状交付
- 5 議事 「熊本市小中一貫教育の在り方について」

|      |   |
|------|---|
| 古賀座長 | 本日は、熊本市小中一貫教育のあり方について、まず、事務局より内容説明をいただき、今後の方向性についての意見交換をしたい。  |
| 事務局  | <p>事務局から、「小中一貫教育のメリット」、「平成30年度の取組状況」、「今後の予定」の3点について説明する。</p> <p>1点目の小中一貫教育のメリットは、いわゆる「中一ギャップ」の緩和をはじめ、学習指導上の成果、生徒指導上の成果、教職員の意識改革などが、全国各地で成果として報告されている。資料p22は、市町村への調査で、大きな成果が認められるものに赤色の印がついている。平成26年度の調査だが、赤色の印は8つあり、児童の不安減少、中一ギャップの緩和、児童生徒の交流、教職員の意識改革などが挙げられている。熊本市においては、いわゆる「中一ギャップ」の緩和はもちろんだが、小規模校の弊害の解消、学力の向上、教職員の意識改革などを小中一貫教育のメリットととらえて、取組を推進しているところである。</p> <p>2点目の「平成30年度取組状況」については、昨年度は全体的な取組として、「幼小中連携教育担当者会」、「幼小中連携の日の各校区の取組」、「モデル校での実践研究」を中心に取り組んできた。また、「熊本市小中一貫教育検討委員会」を年3回、作業部会を年4回開催して、小中一貫校の設置に向けた検討を行った。</p> <p>3点目の「今後の予定」について説明する。昨年度から各中学校区をABCの3つのタイプに分類して、取組を行ってきた。研究モデル校を継続して指定し、先進的な実践的研究を行ってもらっている。今年度は、小中一貫校の取組についての成果と課題の整理、Bグループの全校区で小中連携カリキュラムの作成、全小中学校で小学校高学年の教科担任制（学年1学級の学校は除く）を中心に取り組む予定である。</p> <p>小中一貫校への移行に関しては、最終的にBグループまで小中一貫校へ移行したいと以前からお話ししているところですが、Aグループの小中一貫校の取組の成果と課題をしっかりと検証した上で、Bグループの小中一貫校への移行を考えてはどうかと考えています。この件についてもこの場でご意見をいただき、今後の方向性を検討していただきたいと思います。</p> <p>Bグループでは、乗り入れ授業が難しいと考えていたが、楠校区の小中学校に、昨年までモデル校を受けていただき、英語の乗り入れ授業をしていただいていた。また、五霊中学校については、今年度、1校だけですが、山東小学校の方に五霊中学校の美術の先生が、図工の専科という形で、乗り入れ授業の実施をしていただいている。</p> |
| 古賀座長 | 本検討委員会では、これまでも5年間くらいのスパンの中で、どこまでやるかという議論をしてきたところである。小中一貫校については、今年度突然始   |

|      |  |
|------|--|
|      | <p>まったのではなくて、5年前から準備をして、小中一貫校の設置という形になった。中学校が中心になって連携カリキュラムを作ったときには、小学校の保護者からは不公平ではないかという意見があり、熊本市共通（スタンダード）のものを作ることに対応してきた。このような取組をしてきたのが本検討委員会である。何かを決めるということではなくて、皆で知恵を出しながら、保護者や市民の方々によりよく納得いただけるように取り組んだり、安心して小学校や中学校の教育を広めていただけるように知恵を出し合ったりという性格の委員会であるので、様々な視点からのご意見を自由に出していただきたい。</p> |
| 上妻委員 | <p>富合校区の小中一貫教育のときは、卒業した後の子どもたちの状況を追跡するという動きがあった。富合小と富合中が取り組まれた形とこれからの形は変わってくると思うが、中学校卒業してからの生徒たちの様子について、もし調査結果があれば教えてほしい。</p>  |
| 事務局  | <p>最近の卒業生の意識調査等の状況については把握をしていない。ただ、本年度から小中一貫校がスタートして、どのような指標が必要なかを検討している。学力だけではなく、子どもたちの意識、教職員の意識などを含め、どんなところにポイントを置いて指標を設定するかを考えていきたい。</p>  |
| 古賀座長 | <p>富合小と富合中に関しては、平成25年に報告書を作成した。それに基づいて、新設科目を整理したり、子どもたちの育ちを整理したりして、熊本市全体に広げてきた。富合校区の時は小中一貫というフレーズでよかったが、熊本市全体に下ろすときには、小中一貫では無理があるということで、小中連携という言葉を使いながら、カリキュラムについても連携カリキュラムと一貫カリキュラムを使い分けながらこの6年間やってきたところである。</p>  |
| 事務局  | <p>昨年度、検討委員会で、芳野校区と富合校区は小中一貫校に移行するという方向性が提示され、小中一貫校の設置に繋がった。現在、モデル校の向山小と江南中、河内小と河内中については、来年度に小中一貫校へ移行する予定で考えているが、この点についても検討委員会のご意見をいただきたいところである。</p>   |
| 小田委員 | <p>今年度は、教科ごとに教職員を分けて、過去の9年間のカリキュラムを見直しながら、よかったものを整理したいと思う。今年は、これまで続けてきた英語教育ではなく、算数・数学の授業への小学校からの乗り入れを行っている。Aグループは小学校と中学校が近いところもあるので、本当に効果はあると思う。小中一貫校への移行を進めてもよいのではないかと思う。</p>   |
| 塩津委員 | <p>先ほど何を指標にするのかという話があったが、モデル校では「こんなところが違う」というのが見えてくると、推進しやすくなると思う。昨年度は、意図的に英語でALTの配置を多くしたり、ICT環境を充実したりする取組を行った。モデル校の取組が推進されることが、Bグループの促進につながると思うので、そのあたりのことを聞かせてほしい。</p>   |
| 中嶋委員 | <p>河内小と河内中もいずれ小中一貫校になるという意識があるが、最初は小中連携と小中一貫の違いもわからなかった。実際に動き出してみて、今年度は中学校から英語の乗り入れ授業が始まり、小学校の5・6年の英語を担当してもらっているが、学級担任がその時間は空き時間になり、事務的な仕事ができるようになった。小中一貫教育のメリットがわかってきたところだが、保護者に</p>  |

|      |   |
|------|---|
|      | <p>はまだ伝わっていない。PTAの方には、行事を一緒にしたり、運動会を小中合同でしたり、いろんな場面でメリットについて話をしている。モデル校としてよいところをたくさん発信できればと考えている。組織が違うので文化が違うが、そこを埋めるのも小中一貫とされているところである。</p>  |
| 小田委員 | <p>小さなことだが、今年度は全職員に兼務発令をいただいた。そのことで、「今までとは違う」という意識を先生方がもつようになり、意味あることだと思う。</p>  |
| 塩津委員 | <p>中学校の方は、あまりメリットがないと考える職員がいると思うが、そこはどのように職員に説明しているか。</p>   |
| 小田委員 | <p>今年度は、小学校から中学校の数学に乗り入れをしてもらっているのも、メリットがあると思っている。これまでは、中学校の方に負担が多く、中学校の取組に小学校が参加するという感じだったが、今年度は小・中学校の特活担当者が事前に話し合いをして、役割分担もきちんとしている。兼務発令をいただいたこともあり、小中学校で一緒に取り組んでいるという気持ちがある。</p>   |
| 上妻委員 | <p>小学校の時から関わりの中で、中学校で起こるであろうトラブルを未然に防ぐことができることは、中学校職員はメリットを感じると思う。例えば、特別支援教育に関する保護者へのアプローチにしても、特別な支援が必要な子どもの保護者への啓発がやりやすくなり、それが長い目で見ると中学校教員の負担軽減につながってくると思う。何を求めて小中一貫教育をしているかをわかりやすく示していければよいと思う。</p>   |
| 橋爪委員 | <p>スケジュールに関する評価をどこまでするのか。一部教科担任制の実施であれば、すべての学校がチャレンジしていないといけない。少なくとも時間割は4月にできるので、どれくらいのチャレンジをこちらで想定しているのか。令和元年の評価をする時に、年度末にダメだったから来年度に持ち越しというのでは困る。手立てはどうされているか。</p>  |
| 事務局  | <p>幼小中連携担当者会で、Bグループは全校区で連携カリキュラムを作ることをお願いしている。1月末までに作成することになっているので、2月の担当者会では数校の事例を各学校に紹介する予定である。各校区で、できるだけ早いうちに連携カリキュラムを作成してもらい、PDCAサイクルで少しずつ改善しながら精度を上げたものに変えてもらう予定である。Cグループについては、小学校から一つの中学校に進学するわけではないので、どのような連携カリキュラムを作ればよいかわからないという学校からの意見があったので、教育委員会が検討して2月の担当者会で提案すると伝えている。</p> |
| 橋爪委員 | <p>先ほど、小田委員が言われたのは、一貫カリキュラムは算数・数学みたいな教科の連続性を含めた9年間の指導計画で、各教科でその作業をするということか。</p>   |
| 小田委員 | <p>中学校の先生は、小学校でどんなことをやっているのかをあまり把握していないし、逆に小学校も中学校でどんなことをやっているのか知らないのだから、まずは教科ごとにお互いの取組を見ようということで、教科部会を設定した。</p>  |
| 事務局  | <p>一貫カリキュラムに関しては、向山小・江南中校区で意欲的に取組をされていて、算数・数学の図形の学習に課題があるということで、図形領域の実施す</p>  |

|      |  |
|------|--|
| 橋爪委員 | <p>る時期を意図的に調整して、中学校からアドバイスに行けるような取組を行っている。</p> <p>義務教育学校や私学などを見ていると、中1の内容を小6で学んだり、いろいろな学びがあるが、義務制では教科書があるので、一貫カリキュラムの許容範囲はどのあたりになるのか。</p>  |
| 事務局  | <p>小中一貫校になる大きなメリットは、カリキュラム編成を各学校で自由に行けるといえることである。芳野小などの少人数の学校であっても、個人差は大きいので、学年の枠を超えて学ぶことも考えないといけない。教科担任制だけだったら小中一貫をやらなくてもできるので、カリキュラムの部分でないと、本当に小中一貫校になる意味というのは薄くなると思う。</p>   |
| 上妻委員 | <p>教科書の問題は、富合校区の時から特別に対応してきているので、デジタルコンテンツやデジタル教科書で越えられないのかと思う。ここまでタブレットの整備が進んでいるので、学年の壁が越えられないのはもったいないという気がする。</p>  |
| 塩津委員 | <p>それを解決していくのがICTだと思っている。ドリルパークをする中で、前の学年の内容を学習することができるし、次の学年の内容を学習することもできる。今までは学年という枠で閉じていたが、本当は切れ目がないということに気づけば、先に進むこともできるし、前に戻ることもできる。個別最適化という子どもにあったものを提供するというのも、これからはAIも含めて考える姿勢が必要である。</p>   |
| 事務局  | <p>中学校の先生方は教科の免許があるので、小学校で各教科への乗り入れ授業ができるが、小学校の先生は小学校の免許しかない場合は、中学校での乗り入れ授業は何もできないことになる。今後の小中一貫校への教員配置については、中学校免許を持っている小学校の先生を配置することも検討をお願いしたい。</p>  |
| 古賀座長 | <p>協議の中でいろいろな課題が見えてきたと思う。私の方で3点まとめたい。</p> <p>1つ目は、学年の問題である。校種の問題と思っていたのが、学年の問題になってきた。富合小と富合中の一貫教育は、平成16年度から15年間取り組んできた。最初の5年間は、内閣府の教育改革特区で、思いつくことは何でもやった時期で、小学校1年生から英語学習に取り組んだり、何でもチャレンジした5年間であった。その次が、文科省の教育課程研究の特区で5年間取り組んだ。振り返ってみると、学年や教科書の枠を超えた取組は、最初の5年間だったが、小中一貫の必要性を考えたときに、「発達」や「育ち」の問題が見えてきた。小5から中1への指導が小中一貫教育の肝である。広島県呉市は全国的にも取組が早く、教育特区よりも5年前に小中一貫教育の取組を始めた。これを指導したのが、当時名古屋大学（その後早稲田大学）の安彦忠彦先生で、中央教育審議会教育課程部会の副会長をされていたが、小学校に英語を入れるのも彼の主張だった。安彦先生は小中一貫教育について、前期4年（小1～小4）、中期3年（小5～中1）、後期2年（中2～中3）の区分で、中期が小中一貫教育の醍醐味だと言われた。なぜなら、つなぎの期間であるとともに、自分で学ぼうとするときに具体的な思考から抽象的な思考へ移り変わる育ちの場面であると言われていた。我が国の8割が、呉市と同様の4・3・2制をとっている。</p> <p>2点目は、中期の重要性が認識された9年間のカリキュラムである。小中一貫カリキュラムを作成するときに、中期をどうつくっていかようとしているかに、</p> |

|  |   |
|--|---|
|  | <p>私たちの着眼点や指標がある。小5から中1がどうつなげられているかについて、中一ギャップという言葉で強調されるが、小5から中1は「発達」の視点で見ればなだらかな時期である。10歳と14歳で爆発的に発達するが、その他はなだらかな発達である。そこで安定した時期に、「自分で学ぶ」、「生活の自立」、「職業自立に向けたキャリア教育」などを位置づける必要がある。</p> <p>3点目はBグループのことである。Bグループの困難さというのは、中学校の方が勘違いしている。小学校の事情を確認しようと思ったら複数あるのは大変かもしれないが、Cグループと違ってBグループの中学校には小中共通の校区があるので、地域の教育資源やニーズ等を調べて、中学校の地域の人と一緒に目指す子ども像を作り上げていくとよい。</p> <p>今回は、富合中学校での授業視察を含めて、熊本市の子どもたちにとっての学習環境をベースに考えていきたいと思う。</p> |
|--|---|

6 事務連絡

7 閉会